

<祈りのために>

「神は、この力をキリストに働かせて、…すべての支配、権威、勢力、主権の上に置き…」。

(エフェソの信徒への手紙1章20節)

パウロは、神が(私たちを)「天地創造の前に、聖なる者、汚れのないものにしようと、キリストにおいてお選びになりました」(エフェソ1:4)と語ります。キリストは、放蕩息子(ルカ15章)の譬えを話されたように、父なる神がご自身において無償の慈愛の手を伸ばしておられ、私たち自身の知識・能力・価値・プライドを放棄させて、神の恩寵の前に罪の姿を差し出すように求めておられます。

そして「神はこの力をキリストに働かせ、…死者の中から復活させ、…ご自分の右の座につかせ、すべての支配、権威、勢力、主権の上に置かれ」(1:20)たのです。ローマの信徒への手紙12章9-13章10節は、その神の恩寵に応答すべき聖(きよ)められた愛の行動が記されています。13章1節では「人は皆、上に立つ権威に従うべきです。神に由来しない権威はなく、今ある権威はすべて神によって立てられた」と語っていますが、神の権威とは神の恩寵から与えられる務めです。すべてこの地上の為政者たちには、神の恩寵に応答する権威、すなわち「人の上に立つ者は、人の僕とならなければならない」(マタイ20:27)と語られたキリストから権威が委託されているのです。為政者は、この神の権威に服従すること、すなわち、神の恩寵に応答する統治が求められ、服従する者は、為政者による統治を神に期待して、神に服従するのです。こうして民衆の自由と人権と生活の保障が確保されるのです。さらに為政者は、世界の中核としての「御言葉と御霊」に生きる教会を保護しなければなりません。ここから周囲の世界に平安と祝福が広がり、神の恩寵によって世界が統治されるのです。

キリストにおける無償の慈愛は、「すべての支配、権威、勢力、主権の上に置かれて」おります。ボンヘッファーは「究極(神の恩寵)のことと究極以前(世界)のことは、互いに結びついている。究極のことを強く宣べ伝えることによって、究極以前のことも強める」(キリスト教倫理)と語りました。朝鮮教会の朱基徹牧師は「教会に御言葉の命(神の恩寵)の言葉が語られていないから、国家にも命がないのだ。国家と民族の崩壊は、教会が御言葉の命に生きていないことにある」と説教しました。

教会は、神の恩寵が「すべての支配、権威、勢力、主権の上に置かれている」ことを知っているために、神以外の権威を権威としないのです。この国でキリストが真の祭司であり、天皇は偽りの祭司であると説くのは、異質なことに違いありません。しかし決して教会の自己主張や、独善でも国家に敵対することでもありません。むしろこれを、キリスト者の栄えある重荷として担い続けるべきです。国家の資格について根本的な知識を語り得るのは、教会の他にないからです。これは決して教会の思い上りではありません。この国に対する教会の最大の奉仕です。

<祈り>

父なる神よ、この国の為政者があなたから上に立つ権威が委託されているために、あなたの恩寵によって立てられた権威にふさわしく私たちを整えて、福音に従う信仰の闘いをする者にしてください。しかしこの闘いは挫折の連続です。それでもこの挫折は、教会の財産として残されており、私たちの先達は、数知れない挫折を経験して教会を建て上げました。その結果、国家をも健全に建て上げる役割を投じたのです。どうぞ私たちもキリストに倣って生きる者にしてください。

川越弘(沖縄伝道所牧師)

## 新シリーズ開始『その時に備えて 憲法問題 Q&A』を読む (17)

芳賀繁浩 (福島伝道書牧師)

### Q17 キリスト教会が「平和」を語るのは当然なのでしょうか？

**A17** 平和についての代表的な聖句に、《平和をつくるものは幸いです。その人たちは神の子どもと呼ばれるから》(マタイ 5:9) があります。教会は聖書に基づいて、平和を語ります。精神的・内面的な解釈もありますが、日本や世界の状況を踏まえて考えることも大切です。

しかし、平和について語る教会に対しては批判があります。一つは、憲法九条に対しても言われることですが、キリスト教会が語る平和は理想に過ぎないのではないかと。もう一つは、愛と平和を語るキリスト教こそが、戦争を起こしているのではないかと。後者については、戦後の日本の教会には経験がありませんから、人間や教会の弱さの表れだと言ったような、言い訳めいた話になってしまいますが、これらの批判には耳を傾けるべきでしょう。

「現行憲法」の平和主義は、「戦争の放棄」(第二章)という戦争とのかかわりで語られるのに対して、聖書の《平和》は必ずしも戦争の対義語ではありません。聖書に基づいて平和の理解を深め、今日のメッセージとして語る努力が必要です。また、キリスト者の戦争と平和についての考え方は一様ではありませんから、平和を語ることが偏狭な主張とならないよう注意しながら、平和を実現するために共に労するものでありたいと思います。

**新Q17-1** 聖書の《平和》とは何ですか。

**新A17-1** 単に戦争がない状態のことではなく、造られたすべてのものが、神様の御心のままに共に生き、喜び、休らうことができることです。それは、創世記が「神は、造ったすべてのものを御覧になった。それは極めて良かった」(1:31)と語り、イザヤが「狼と小羊は共に草を食み／獅子は牛のようにわらを食べ／蛇は塵を食物とし／私の聖なる山のどこにおいても／これらは危害を加えることも、滅ぼすこともない／——主は言われる」(65:25)と約束するものです。

**新Q17-2** なぜ、この《平和》は失われてしまったのですか。

**新A17-2** 人の罪のためです。創世記は、アダムとエバが「神のように善悪を知る者」(3:5)となろうとして、エデンの園すなわち神の《平和》を失ったと教えています。

善悪を知るとは、自分が正しいとすることが正しく、間違いだとすることが間違いだということ。そして、神のようには、自分が正しいと思うこと「だけ」が正しいとすること以外ではありません。そのとき、それぞれの正しさを一方的に主張するだけの「正しさの衝突」が起こることになるでしょう。そして、その手前勝手な正しさをどこまでも貫こうとするなら、そこには対立と争い、そして戦いが起こらざるを得ません。

**新Q17-3** この《平和》をどうしたら伝え、証しし、つくることができるのでしょうか。

**新A17-3** 何よりもまず、教会自身がしばしば神の言葉ではなく人の思いに従い、勝手な正義を振りかざして《平和》を傷つけ、損ない、争いと戦いを引き起こしたことを、神と人との前に率直に認め、悔い改めることです。

そしてその上で、「剣を鞘に納めなさい。剣を取る者は皆、剣で滅びる」(マタイ 26:52)とのイエス・キリストの言葉を、誰に対しても愚直に語り、証ししていくことです。

それは、「未だ救われない」この世にあっては、無理解と嘲笑、嘲りと批判を受けることにならざるを得ないでしょう。けれども、教会のかしらであるキリストがそう言われ、そのように歩まれ、「あなたは、私に従いなさい」(ヨハネ 21:22)と言われる以上、教会はそれ以外の道を歩むことはできません。

歴史は、まさにそのようにして、「主流派」の教会からは「異端」とされ、国家からは犯罪者とされて、苦難の道を歩んだ少数者によってこそ、「良心的兵役拒否」を始めとする《平和》をつくりだすための働きが担われてきたことを明らかにしています。

かつての侵略国であり、その反省のもとに「平和憲法」を持つに至った、この日本という国家の中に置かれている日本の教会の、特別な使命を覚えたいのです。

## 首相および閣僚によって繰り返される靖国神社参拝・玉串料奉納に強く抗議します

内閣総理大臣 岸田文雄様

2023年8月15日、あなたは靖国神社に玉串料を奉納し、全国戦没者追悼式において「今日の我が国の平和と繁栄は、戦没者の皆さまの尊い命と、苦難の歴史の上に築かれたものである」と言い、「衷心より、敬意と感謝の念を捧げます」と述べました。また、あなたが経済安全保障担当大臣に任命した高市早苗氏は、国務大臣の肩書きで靖国神社を参拝し、「国策に殉じられた御霊に哀悼の誠を捧げて参りました。そして感謝の思いを伝えて参りました」と述べました。私たちは、首相や閣僚によって繰り返されるこのような言動に断固として反対するものです。

日本キリスト教会は、1967年の第17回大会で「靖国神社に対する国家の保護に反対する声明」、1969年7月の臨時大会で「靖国神社法案に関する抗議声明」を採択し、同年の第19回大会で靖国神社問題特別委員会を設置し、全教會的に靖国問題に取り組み、これを信仰告白の戦いと捕らえ、宣教の課題として認識してきました。1970年の第20回大会では、靖国神社に対して「宗教法人靖国神社が日本基督教会の教師栗田巧、小川亮、武長敬三、東山武を祭神として祀っていることを拒否し、祭神名簿から抹消されるよう要求します」との申し入れを行いました。私たちは、自分たちの愛する親、兄弟、子ども、教会の仲間たちが、国策によって死に追いやられたのみならず、死後も勝手に靖国神社に祭られていることに耐えがたい苦痛を覚えています。とくに、あなたがた首相や大臣たちが、私たちの信仰の良心を蹂躪するようにして、一方的に、彼らを敬意や感謝を捧げる対象としていることに、憤りを覚えざるを得ません。

イエス・キリストは、「あなたがたは、わざわいである。預言者たちの碑を建てるが、しかし彼らを殺したのは、あなたがたの先祖であったのだ。だから、あなたがたは、自分の先祖のしわざに同意する証人なのだ。先祖が彼らを殺し、あなたがたがその碑を建てるのだから」（ルカによる福音書11章47・48節）と述べられました。この指摘は、かつて国策によって死に追いやられたものたちを、いま国策を講ずべきあなたがたが顕彰する行為そのものを指弾しているように思われてなりません。

今回のあなたがたの行為は、さっそく中国や韓国の外務省から厳しい批判を受けました。特に韓国外務省報道官は「深い失望と遺憾」を表明し、「日本の責任ある人物らが歴史を直視し、謙虚な省察と真の反省を行動で示すことを求める」と述べています。これを内政干渉と言う人がおりますが、靖国神社は2万以上の韓国人を遺族に告げることなく勝手に日本名で合祀しており、決して国内問題ではないのです。

私たちは、靖国神社問題に取り組む中で、かつて日本の教会が国家による侵略戦争に加担し、自ら神社に出向いて戦勝祈願を行っただけでなく、隣国のキリスト者たちに神社参拝を強要した罪責を覚えるようになりました。そして、罪責を告白し、悔い改めることによってのみ、隣国の主にある兄弟姉妹たちとの和解が与えられ、ともに宣教に励み、平和を作り出す活動に従事する喜びを共有できることを経験しました。私たちが首相や閣僚と靖国神社との癒着を厳しく指摘せざるを得ないのは、国家神道がかつてアジア諸国にもたらした甚大な惨禍を虚心坦懐に学ぶことによってのみ、「平和を維持し、専制と隷従、圧迫と偏狭を地上から永遠に除去しよう」と努めている国際社会において、名誉ある地位を占める」ことができるのを知っているからです。靖国参拝や玉串料・真榊の奉納は、これを最後にしてください。

2023年8月15日

日本キリスト教会靖国神社問題特別委員会 委員長 小塩海平

## <ニュース>

### ○日本は海洋放出計画を正当化できない 中国外交部

中国外交部の毛寧（もう・ねい）報道官は20日の記者会見で、日本の放射能汚染水海洋放出について「もし安全なら海洋放出の必要はなく、安全でないならなおさら放出すべきでない」と述べ、「日本はいかに過ちをごまかそうと、放出計画を正当化することはできない」と強調した。（新華社北京 2023.07.21）

### ○“自衛官戦死に備えよ”元陸幕長 靖国神社「復活」唱える

陸上自衛隊の元制服組トップが、自衛官の戦死に備えて靖国神社を国家の「慰霊顕彰施設」として「復活」させよと公然と主張していることが、改憲右翼団体「日本会議」の出版物の記事で分かりました。

火箱芳文（ひばこ・よしふみ）元陸上幕僚長は『日本の息吹』8月号の「国家の慰霊追悼施設としての靖国神社の復活を願う」と題する記事で、軍事力の抜本的強化を図る安保3文書の閣議決定を「大いに評価」しつつ、自衛隊は国内法的には軍隊ではなく、「旧軍人と自衛官では国家の処遇、国民の意識が格段に違う」などとして、「近い将来国を守るため戦死する自衛官が生起する可能性は否定できない。我（わ）が国は一命を捧（ささ）げる覚悟のある自衛官たちの処遇にどう応えるつもりなのか」と問いかけています。

その上で、戦後、「靖国問題」が放置されているのは「誠に残念」だとしつつ、「国家の慰霊顕彰施設」がない現状を嘆き、自衛官が「戦死」した場合、「筆者ならば靖国神社に祀（まつ）ってほしい」として、「国家の慰霊顕彰施設」としての靖国神社を復活させ、「一命を捧げた」（戦死した）自衛官を「祀れるようにする制度の構築が急がれる」などと主張しています。

安保3文書に基づく憲法違反の敵基地攻撃能力の保有や、米軍と一体化した自衛隊が米軍の指揮下で相手国を攻撃する体制が強化されるもとの、戦死した自衛官をどう扱うのかという問題が切迫した課題となっていることが、火箱氏の主張からもうかがい知ることができます。（しんぶん赤旗 2023.07.31）

### ○台湾有事阻止へ「戦う覚悟」＝自民・麻生氏、中国念頭に危機感

【台北時事】自民党の麻生太郎副総裁は8日、台北市内で講演し、中国が軍事的圧力を強める台湾海峡で戦

争を未然に防ぐため、「戦う覚悟」を示す必要があるとの認識を示した。「日本、台湾、米国をはじめとした有志国に、強い抑止力を機能させる覚悟が求められている。戦う覚悟だ」と語った。

麻生氏は日本と台湾の安全保障環境について「平時から非常時に、少しずつではあるが、確実に変わっていている」との危機感を表明。「今、最も大事なことは、台湾海峡を含むこの地域で戦争を起させないことだ」と述べた。抑止力を機能させるには「能力」に加え「いざとなったら使う意思」が重要と指摘した。（時事通信 2023.08.08）

### ○日本閣僚の靖国神社への奉納・参拝 韓国政府「深い遺憾」

【ソウル聯合ニュース】韓国外交部は光復節（日本による植民地支配からの解放記念日）の15日、日本政府の閣僚が戦争犯罪者を合祀（ごうし）する靖国神社に玉串料を奉納したり参拝を行ったりしたことに對し遺憾の意を表明した。

同部はこの日、「日本の過去の侵略戦争を美化し、戦争犯罪者を合祀した靖国神社に、日本政府と議会の責任ある指導者がまたも供物料を奉納したり参拝を繰り返したりしたことに深い失望と遺憾の意を表す」とする報道官論評を出した。

また、韓国政府は日本の責任ある人々が歴史を直視し、過去の歴史に対する謙虚な省察と真の反省を行動で示すことを促すと強調した。

日本メディアによると、岸田文雄首相はこの日午前、靖国神社に玉串料を奉納した。奉納は自民党総裁名義で行われた。

また、高市早苗経済安全保障担当相が昨年に続いて靖国神社を参拝し、超党派の議員連盟「みんなで靖国神社に参拝する国会議員の会」のメンバーも一斉参拝した。

日本の政治指導者らの靖国神社参拝と供物などの奉納は、日本による侵略戦争を擁護する行為と見なされ、韓国など周辺国と日本との間で長年にわたり対立の火種となっている。（聯合ニュース 2023.08.15）

824号ヤスクニ通信 2023年9月10日

発行 日本キリスト教会靖国神社問題特別委員会  
発行人・編集・発行 小塩海平（東京告白教会）

<編集後記> 靖国神社問題全国協議会は、大会前夜、10月17日（火）の午後7時から、蒲田御園教会で開催します。内容に関する詳細は、追って連絡致しますので、ぜひお誘い合わせの上、ご参加ください。K.K.